

辛亥期の「新しい女性」

— 尹銳志の場合 —

狭間直樹

(京都大学人文科学研究所助教授)

松尾洋二

(京都大学大学院生・中国近代史)

これまで、この連載では最近の辛亥革命関係資料の書誌的紹介を主としておこなってきたが、今回はいささか趣向をかえて、それらの新出資料のひとつを具体的にみてみることにした。とりあげるのは、回想録のひとつ「尹銳志と周亜衛」(『浙江辛亥革命回憶録』所収)で、さきに小野信爾氏が「興味津々」と評して概要を紹介されたものである(本誌一八九号)。

周亜衛の弟周進三の口述をまとめたこの回想文をとりあげたのは、なによりも、辛亥革命なる歴史の大転換に積極的にかかわった当時の「新しい女性」のひとつの姿を具体的に提示したかったからである。尹銳志の郷党の先輩には有名な秋

瑾がいる。彼女については武田泰淳のすぐれた伝記小説『秋風秋雨 人を愁殺す』(筑摩書房 一九六八年)があるので、それをみてほしいが、その周辺にはこの尹氏姉妹のような番を待ちかまえていたのである。もちろん「新しい女性」はほんのみにぎり、コンマ以下の少数者にすぎない。しかし数は少なくても、このようなタイプの女性が縦横の活躍をはじめたという点にこそ、中国近代の時代相が確実に反映されていた。夫の弟の手になる回想という点を割引いても、ややオーバーにみえる尹銳志の女傑ぶりは、三綱五常の封建倫理をつきやぶり、自己に忠実に生きようとする近代中国のイ

ンテリ女性が、なにはともあれ、ほとんど必然的にたどらねばならない「生」の軌跡だったのではないだろうか。

光復会のこと、黎元洪がつぎだしのさいのエピソードなど革命に直接かかわることがらについて、この回想が重要な資料を提供していることはいうまでもない。だがそののみならず、さりげなく書きとめられた教句のなかに、当時の社会状況をいきいきとつづ描写がおりこまれていて読者の歴史的好奇心を刺激する。その一は、父母の学問(仕官)への大きな期待がなんと木版本一千数百冊の二十四史の購入となつてあらわれたこと。書物の価値がいまとは比較にならないほど貴重なものであったことを、想起する必要がある。清末のこととして、アーサー・スミスは、印刷が鮮明で誤字のない版のいい康熙字典は、新しければ村塾の教師の一年分の報酬ぐらゐの値段だといっている(『支那の村落生活』一一二頁)。康熙字典でさえそうだとしたら、二十四史がどれほどのものか、いくらか想像がつこうというものだ。ちなみに一九三〇年のことだが、商務印書館が発売したかの百衲本二十四史は八百冊、影印本ではあるが予約価で三百元、当時の普通の労働者の一年分の給料どころではなかったのである。そんなに高価でもあえてそれを買おうというのだから、やはり「硯台畑に悪い作物はならぬ」との社会的風潮の確固たることをそこにみてとれよう。

その二は、嘉興の世家の息葛敬恩との共同生活である。世家の息は故郷からゴックをつれて北京に遊学するという優雅さであるのに、かつては二十四史を買えたほどの商家の方はすでに没落して貧乏だという。世家の資産の柱はおそらく田畑なのだろうが、その対比はやはり封建社会の側面をうつしている。葛敬恩もこの「三光学舎」の生活について回想文で簡単にふれているのだが(『辛亥革命在浙江』、『辛亥革命回憶録』第四冊、一二五頁)、かれの方はもちろん生活の差は口にせず、同宿の周亜衛と裴紹が尹氏姉妹と結ばれたことを「革命の佳話」だというにとどまっている。

その三は、周家の盛衰のおどろくべきテンポのはやさである。豆腐屋から蚕種の行商で財をなし、やがて没落したというが、この記述からすれば、一八八〇年代から一九〇〇年代にかけてのことだろう。この時期は、生糸が茶にとってかわって中国の最重要輸出品となった時期である。長い歴史をほこる紹興府の蚕種が大量に湖州地方等の養蚕地帯に売りさばかれたことは、のちの調査にもみえる(上原重美『支那蚕糸業大観』九八頁)。この半植民地的産業化の波にのって「発財」したのが、なにかのつまずきで没落したのである。浮沈のはげしさには眼をみはらされるものがある。

前置きはこれぐらいにして、以下に訳文をかかげよう。

尹銳志と周亜衛
周進三口述・陳覺民記録

幼少より勉学につとめる

わたしの長兄周亜衛は一八八九年（光緒十五年）二月に生まれ、一九七六年九月に亡くなった。浙江省曠興西郷白泥墩の出身で、本名は普文と言ひ、辛亥革命前夜に名を亜衛と改めた。そのとき弟の名も亜青と改めたので、兄弟二人の名をつらねると「衛青」となる。衛青とは漢の武帝のとき、匈奴を征伐した名將の名で、兄弟の名前の中には「満人を駆逐する」という意味も含まれていたのである。

父、周忠煥はこの村で豆腐屋を開いていたが、のち少し金をためて、蚕のマユを商いはじめ、たえず湖州まで往復していた。わたしたちの山里では養蚕農家が多かったからである。母の姓は李で、外祖父は読書人のひとりだった。当時のいわゆる書香の家（代々の学者風の家）で育ったので母も字が読めた。母は幼少から家風の感化を受けていたので、子供が勉強して科擧に及第することを強く望み、そのため長兄に對する要求も厳しかった。また、当時、郷里で有名であった先生を家庭教師に招いていた。毎晩、母は裁縫仕事をしながらも、子供の勉強ぶりを監視していた。あるとき、長兄が熱心に勉強していなかったのを見て、母が長兄を手でたたいたところ、銅製の指ぬきをはめていたため、血がふきだしてき

って数日間も絶食したため、やむなく承知し、彼女を「愛華女学堂」に入學させたのだった。尹銳志は熱心に勉強し、成績も良かったが、生まれつき、おとなしくしているのが嫌いで活発な性格だった。

曠興における光復会の機関は西郷の王金発の家に設けられ、県城内にもひそかに事務所が設けられていた。かつて、事務所内にスパイが潜入し、省当局に密告し、内外呼応してこの秘密機関を破壊しようとしたことがあった。幼少から鋭い神経を持っていた尹銳志は、この事を探知すると、すぐに光復会曠興事務所に報告した。調査の上、それが事実だと判明したので、機関ではスパイを処分し、対応を準備した。省から派遣されてきたスパイは、当時王金発・竺紹康・張伯岐らがみな曠興人であり、曠興における光復会の潜在勢力が大きいということを知っていて、手を出す勇氣がなく、そのまま逃げ去るしかなかった。この事件があつてのち、光復会はこの弱冠十三歳の尹銳志の入会を認めたのであつた。

長兄の周亜衛が光復会に参加したのは一九〇六年であり、当時、かれは弁目学堂の学生であつた。家が中途で没落したため周亜衛は十八歳の年に杭州に来て、はじめ杭州府中学堂で学び、まもなく、試験を受けて弁目学堂に入學した。弁目学堂では學費が不要だったからである。いわゆる「弁目学堂」とは、軍隊の正目・副目（班長・副班長に等しい）

たことがあつた。長兄にはその傷あとが大きくなつても残っていた。こうして、長兄はよく努力し勉強したのである。

ほかに、父母が子供たちに抱いていた切実な希望をよく示していることがある。父は長兄に木版の『二十四史』計千数百冊のセットを買い与えたのである。それを曠興県城からもつて帰るのに何人もかついでこなればならなかったほどである。これは村全体を驚かせるほどの事件であつた。

光復会に加わる

わたしの長兄周亜衛と兄嫁尹銳志の二人はともに光復会會員だったが、尹銳志の方がはやくから参加しており、しかも、光復会における地位も重かつた。兄嫁の略歴を記そう。尹銳志（一八九〇—一九四八）は曠興西郷の出身で、母親は早くなくなり、妹の維峻とともに外祖母に育てられた。外祖母の家は曠興県城内にあつたので、尹銳志は幼少より、その「愛華女学堂」で學んだ。彼女が女子学堂で學ぶのにも、曲折したいきさつがあつた。清朝の光緒末年時は各地で學部の頒布した『辦学章程』の規定にしたがつて、陸續と各段階の男子学堂・女子学堂が設立され始めていたが、古い社会觀念が依然深く根をはっていたため、女子学堂で學ぶ娘たちの数はやはりあまり多くはなかつた（I）。尹銳志は幼少より気性がはげしく、彼女が女子学堂で勉強したいと言いだしたとき、はじめは外祖母も聞き入れなかつたが、彼女が怒

——班長は旧日本軍の分隊長にあたる。を養成していた所である。当時、すでに、浙軍新軍第一標が編成され、第二標が編成訓練をはじめており、第二標は第一營を統轄していた。第二標標統（团长——旧日本軍の連隊長にあたる）は蔣尊簋（諸營の出身）、執事官（副团长）は朱瑞（嘉興の出身）、第一營管帯（營長——旧日本軍の大隊長にあたる）は蕭星恒（湖南の出身）、督隊官（副營長）は徐則恂、隊官（連長——旧日本軍の中隊長にあたる）は葉頌清らであつた。弁目学堂の隊長・教官はみな第一營の幹部が兼任していた。蔣百里も弁目学堂の教官であつた。

秋瑾烈士は一九〇六年、杭州に来て、新軍の中で多くの人を推薦して光復会に加入させた。第二標で加入したものは朱瑞・葉頌清・周鳳岐・俞焯などがある。弁目学堂の學生のうち、秋瑾の推薦で光復会に加入した者には、周亜衛・裘紹・徐光國・吳斌・呂和音・徐雄・柯制明・潘知来・邢復などがある。

革命に功を立てる

尹銳志は光復会加入の翌年には紹興に来て、秋瑾が紹興城内万安橋のたもとに創設した「明道女学堂」にはいつて學んだ。それと同時に妹の維峻も、彼女のさそいで明道女学堂で學び、光復会にも加入した。まもなく、尹銳志は上海での活動に派遣されることとなり、姉妹ともに上海に行き、そこで

爆弾製造技術を習得した。のち、姉妹はみずから作った爆弾を持って北京におもむき、清王室の要人を爆殺しようとしたが、土地不案内のため、手の下しようがなく、再び、上海にもどってきた。これは一九〇九年の事である。上海で彼女たちはひそかに爆弾を作るため、フランス租界霞飛路 (Avenue Paul Brunat) に部屋を借りていた。彼女たちとともに爆弾を作った者に、また楊哲商がいた。ある時、楊哲商は爆弾製造中に不注意から火薬を爆発させてしまい、かれのからだは瞬時にバラバラに飛び散り、尹銳志も負傷した。楊哲商の遺体はのち西湖岸の陶成章烈士の墓の傍らに埋葬された。

光復会が決定した一九〇七年の安徽・浙江同時武装蜂起計画によれば重点地区である安慶は徐錫麟が、紹興は秋瑾が指揮をとり安徽、紹興及び金華、処州などの地で同時に決起し、各々の経路から南京を攻取るとともに江蘇・浙江・安徽の三省の要地を占領し、進んでは北京をおびやかす、退いては東南の半壁を保てる態勢を作るというものであった。長兄、周亜衛は光復会加入後、一九〇七年五月に紹興の大通学堂に派遣されて秘密の革命活動に参加した。まもなく、朱瑞は周亜衛を弁目学堂に復帰させて卒業試験を受けさせ、終了と同時に第一營正目のポストにつけた。のち、まだ新兵を募集していなかったたので、ふたたび周亜衛は紹興の大通学堂に行つて活

であった。陸軍小学堂の二人の隊長のうち、ひとり光復会会員周亜衛で、一人は同盟会会員の葛敬恩であり、ともに革命活動家であった。そのほか、排長の呂煥光・葛瑞・商文蔚・陳鈍・邵武・王寿琴などはみな革命に関心をもっていた。当時、張伯岐・周亜衛・裘紹はともに城站(？)攻撃に参加した。

杭州の辛亥光復の戦いに、光復会は決死隊を組織した。男子隊長は張伯岐、女子隊長は尹維峻であった。九日十四日午後、決死隊は上海から杭州に来た。持って来た武器弾薬はみな蒲場巷の周亜衛のいる陸軍小学堂にはこび入れた。その晩、王金発の率いる決死隊が巡撫衙門を包囲攻撃し、尹維峻が最前列に立ち、まず爆弾を一発投げ込み巡撫衙門の一部を焼き払って、杭州の光復は血を見ずに完了したのである。尹維峻はわたしの兄嫁尹銳志の妹で、そのとき、わずかに十七歳であった。

徐錫麟・秋瑾の蜂起が失敗してのち、後期の光復会は陶成章が指導し、総機関は依然上海に置かれていた。清朝官憲の耳目を避けるべく陶成章はいつも南洋や国内各地を奔走して革命の指導にあたっていたので、上海方面の活動は部分的に尹銳志の責任となっていた。もちろん、光復会の秘密の革命活動は清朝支配下の地域ではできず、ただ租界でのみ活動の余地があった。上海にはイギリス租界(公共租界とも呼ばれ

動した。このときには河南の人程毅が同行した。秋瑾に会ったのち、程毅は大通学堂にとどまって教員となり、周亜衛は嵯県に派遣された。周亜衛はその時、同志を起ち上がらせて隊伍を組織し、武器をもって安慶に赴き蜂起に参加せよとの命令を竺紹康に伝え、また、竺紹康を助けて万事を処理せよとの命令をうけていた。当時、交通が非常に不便だったため周亜衛は船に乗ったり陸路を急いだりして竺紹康を訪ね、秋瑾の指示を伝えた。竺紹康は秋瑾の指示に従って、ふたたび周亜衛に嵯県南郷烏岩鎮に行つて俞継春を訪ね、同志を起ち上がらせよとの命令を伝えさせた。周亜衛が俞継春の家に一晚泊ったとき、嵯県城から、使者が来て俞継春に、徐錫麟は安慶で巡撫恩銘を刺殺したのち捕えられ、心臓をえぐられ斬首されたと報告した。紹興の大通学堂も搜索に会い、秋瑾が捕えられた。嵯県城内でも竺紹康を捕えようとしていたが、竺自身はすでに風聞を聞いて逃走していた。周亜衛は、この報告を聞くとき、急に急いで俞の家を離れ、ふたたび竺紹康の家に行つてみたが、表門は開かれたままで、中には誰もいなかった。そこで、杭州に帰り、数日間第一營で新兵の正目を勤めた。のち、陸軍小学堂ができると、周亜衛は副学長(副排長——排長は旧日本軍の小隊長にあたる)のポストを与えられたので、その職についた。

陸軍小学堂は杭州の辛亥光復時の重要な革命勢力のひとつ

た)とフランス租界があったが、革命活動家に対する搜索はフランス租界の方がイギリス租界ほど厳しくなかったの(一九一〇年(宣統二年)陶成章はフランス租界平済路(Rue Bunschin)に居宅を借り、秘密の革命活動に従事する機関を設け、「銳峻学社」と名付けた。つまり、尹姉妹の名から各々一字ずつを取って命名したのである(「銳進」とする書もあるが誤り)。尹銳志姉妹は、そこに住んで光復会の日常一切の事務の責任を持っていた。一九〇七年、安慶・紹興両地の蜂起が挫折してから、光復会の財政事情は苦しく、そのため、尹銳志姉妹は本や雑誌を売って日常生活をしのごとにも、革命活動への一助とした。数個の焼餅を食べただけで一日をすごしたときもあった。

一九一一年、武昌の辛亥革命以前に、尹銳志は武昌に行き、新軍に革命を扇動する活動に参加した。新軍第八鎮工程第八隊隊官呉兆麟・革命活動家熊秉坤・金兆龍らの蜂起が勝利したとき(一九二一年十月十日)、総督瑞澂は逃げ出し、武昌が蜂起軍に占領されてから、呉兆麟は新軍協統領の黎元洪を湖北都督に推すことを提案した。しかし、黎元洪を探し出せずにいると、やはり、尹銳志が黎元洪の避難している所を知っていた。なんと、黎元洪は革命軍の勢いが盛んであることを知り、自分の家にいる勇氣がなく、部下の紹興出身の幕友の家に逃げ隠れていたのだ。嵯県は紹興府に属する

国民政府で訓練總監部常務副監となった。總監は何応欽^{ハクイン}、政務副監は賀国光であった。当時、南京政府には軍事方面に關し、三つの部があった。一つは參謀本部で次長は葛敬恩、一つは軍政部で次長は陳儀、一つは訓練總監部で副監は周亜衛であった。三人はともに浙江の出身で、しかも日本の陸大の学友（陳儀・周亜衛は第一期、葛敬恩は第二期）であり、これも偶然の一致だった。

対日抗戦軍が興り、政府が西遷すると、長兄周亜衛は陸軍大学副教育長となった。教育長は楊傑^{ヤクキョウ}で、陸軍大学は貴州省遵義にあった。その後、かれは重慶で軍事委員会法制所所長になった。抗日戦勝利後、かれは重慶にとどまった。一九四八年、陳儀が浙江省政府主席の任につき、周亜衛を杭州に招いて浙江省政府顧問とした。

解放後、周亜衛は以前重慶で董必武^{トウヒフ}同志と交際があったので、北京に行つてかれをたずねた。董必武同志はかれを北京飯店で実施されていた学習班に紹介して学習させ軍事委員会高級研究室に送つて主任に任じた。かれは俸給として毎月粟千二百斤を受けとつたが、これは次官の月給に相当するものであった。そのうち、北京文史館館員^{ウイ}のポストを与えられ、ついで、わずか一カ月で今度は全国政協特別招待代表^{ウイ}となった。一九七六年に世を去つた時、八十七歳だった。長兄周亜衛の軍事方面に関する著作は小編がいささかある

ある。長兄周亜衛はその班の教育長だった。あるとき、陳誠^{チン}が来て講義し、「治国は必ず齊家を先にす」ということに言い及んだとき、こう言った。「『国を治めるのは難しいが家を治めるのはもっと難しい』もし、信じないのなら、一つ事実を挙げることができる。尹銳志^{ウイ}女史は周亜衛先生の夫人だ。尹女史は賢い家長だ。家の一切のことはすべて夫人が握つていて、周先生は口出したことがない。亜衛先生は人の家と呼ばれていくが、人を自分の家と呼んだことがない、亜衛先生は中将の月給を受けとつていて、毎月ごく少額の小遣い銭をもらうだけである」などなど多くの事実をあげ、「亜衛先生は私の先輩であり、この話はすべて事実だ。失礼を願みず言ったが」と言葉を終んだのだ。わたしの長兄はこれを聞いても、苦笑しただけだった。

重慶における尹銳志

兄嫁は活動的な人だったので、抗日戦争時代、長兄にしたがつて重慶に住んだ時、奉仕隊を作つていた。彼女自身も毎日工場に行つて労働奉仕をしていた。彼女は前側にポケットがあり、その中に工具を入れておけるゆつたりとした旗袍（チャイナドレス）のような服をデザインしたのも当時のことである。彼女は自動車の運転や、修理もできた。彼女と同年輩の中国の女性で自動車を運転できる人はやはり少なかった。一九四二年か四三年、蔣介石は「独裁」を指弾する世論の

が専著はない。しかし、かれは終生文字改革に強い関心を持ち、かつて数百万字の文字改革論を書いたことがあった。けれども、その原稿はとうとう篋底に秘めたまま一度も広く世に問うことがなかった。

夫婦の間

長兄周亜衛と兄嫁尹銳志は一九一三年、北京の「三光学会」で知り合い、一九一六年、杭州で結婚した。ともに光復会の同志であり、しかも、同郷だったことが結婚のおもなききっかけだった。兄嫁は豪快で気迫があったが、性急で氣を回す人柄だった。一方、長兄は誠実で愚直ともいえるような人柄だった。このふたりは性格はちがったが、三十余年間無事につれそつてきた。長兄が日本の陸軍大学で勉強していたとき、兄嫁は金があったので東京で同居していた。わたしはそのとき東京の高等学校で勉強していたが、ある日、兄嫁がとつぜん、わたしの所にやつてきて「あなたの兄さんが逃げだした」と言った。わたしはびびりして詳しく聞くと、何のことはない、家で口げんかがあつて長兄がとつぜん出ていったとのことだった。そのあと、兄嫁はわたしのところに二人の結婚の時の写真を持ってきて新聞に尋ね人の広告を出すように言ったが、まもなく、長兄は家に帰つてきた。

兄嫁の個性は当時の軍・政界で有名だった。たしか、一九四〇年ごろ、廬山訓練団^{ウイ}が軍官班を始めたときのこと

追及を避けるため、各党各派の併存を認め、うわべをとりつくりつた。そこで兄嫁尹銳志はあらたにまた「光復会」の看板をかかげた。総会は重慶に設けられ、尹銳志が会長に、周亜衛が副会長になった。各省にすべて分会があり、浙江省の光復会責任者は裘政^{ウイ}、字は伯繼^{ウイ}だった。裘政の父親は裘紹、母親は尹銳志の妹維峻である。裘政は解放前、かつて昌化県長になったことがある。

ついでになるが、尹維峻は早く死んだ。彼女はいつも夫の裘紹とけんかし、あるとき、おたがい腕力に訴えたのだが、そのとき、彼女は妊娠しており、このため流産して死んでしまったのである。裘紹はのち童保^{ウイ}、軍隊に従つて広東に出陣し、そこで死んだ。

(1) 学部(文部省)の設立は一九〇五(光緒三二)年十二月六日、『升学章程』とは法令の名称ではなく、学堂(学校)を創弁(設立)することにわかる法令一般をさしているのだから。学部が学堂設立のための各種の法令をつぎつぎと制定したので、実際に各地で学堂が設立された。たとえば、小学堂は一九〇七(光緒三三)年に約三・五万校、生徒約九十万、一九〇九(宣統元)年に約五・二万校、約百五十万人を数えたが、生徒の男女比はなんと一五〇対一だったという(陳啓天『近代中国教育史』一三四、一三六頁)。

(2) 一九〇六年に浙江省の新軍第二連隊に任せられた蔣尊簋が同

連隊の下士官養成のために同年、杭州城外に設立した学校で、定員以上に応募者が殺到したという(葛敬恩「辛亥革命在浙江」)、『辛亥革命回憶録』第二冊、九三頁)。

(3) 清末の革命家は、ロシアのナロードニキの影響を強くうけてどの派も暗殺を重視したが、とりわけ光復会の系列は熱心だった。そのさい、もっともよく利用されたのは爆弾である。

(4) たとえば、光復会の重要メンバーであった陶治公でも「銳進学社」と記している(「光復会の組織と発展」、『浙江辛亥革命回憶録』二五一頁)。

(5) 黎元洪が革命派兵士に見つけられたのがかれの幕僚の劉文吉の家であったことは諸書に記載があり、また、ベッドの下にかくれていたところをひきだされたとの風説を記すものもあるが、ここまで具体的なのは初見である。

(6) 清仏戦争敗北後、西洋式軍隊の必要を知った清朝は、李鴻章にそのための軍官学校をつくらせた。李が一八八五年、天津で開設したのが天津武備学堂で、のち、各省でそれにならって設立された。のち、一九〇四年、北京に陸軍大学堂が設立され、各省には陸軍小学堂、南洋、北洋(天津)、湖北、広東には陸軍中学堂を設けるとの陸軍学堂章程がつけられたが(丁致聘「中国七十年來教育紀事」一三頁)、ここで武備学堂といっているのは、陸軍中学堂のことである。

(7) 民国初年の陸軍大学校の教官として、東亜同文会編『第參回支那年鑑』の「支那傭本邦人人名表(大正三年十二月末日現在)」(六〇頁)に以下の名があげられている。

宮内英熊 兵学教授(原籍) 鹿児島県
是永重雄 兵学教授(〃) 福岡県

山口四郎 馬術及日文化教授(原籍) 佐賀県

なお、『第四回支那年鑑』の同人名表(二四四頁)にも大正五年十二月末日現在として右記三名と、そのほかに多田駿、中島完一の名がみえるが、担当学科と原籍の項をかく。ただ、南里知樹氏の苦心作である『中国政府雇用の日本人』(竜溪書舎 一九七六年)の「資料2:中国政府傭本邦人人名表 一九二一—一九二二」の十四頁には、宮内、是永、山口の三氏の名がみえるが、その契約期間を前二氏が一九一三年十月より一四年三月まで、山口氏を一三年十月に始まり「終期未定」とする。これは、『第四回支那年鑑』の「契約始期」とも山口氏をのぞいて一致しないのだが、それ以上に問題なのは、このとおりだとすれば、年鑑のいう一九一四、一六年末の在北京が否定されることである。南里氏が依られたのは、一九二二—一八年度末外務省政務局『支那傭本邦人人名表』という基礎資料なので、あえてここに記して問題点を指摘し、後考をまつことにする。

(8) 尹氏姉妹にかぎらず、辛亥革命の時期の女性の活躍は、主としてインテリにかぎられたものではあったが、きわめて華々しいものがあつた。専制主義を批判するに民主主義をもつてしたためおのずと男女平等がうたわれ、自覚した女性の革命隊列への積極的な参加がうながされたのである。ところが、革命によって樹立された新しい共和国はやはり男中心のものでしかなかったため、彼女たちはそのような新体制にたいして異議申し立てをおこなった。

た。そのもつともセンセーショナルな事件は、一九二二年三月、

女子参政同盟会員の一群による、南京臨時参議院にたいする「武装状態」でのおしかけである。参政権をめぐる婦人運動のこの間の経緯は、小野和子氏の労作『中国女性史——太平天国から現代まで』(平凡社 一九七八年)の第四章にくわしいので参照してほしいが、このように待遇問題についてのディテールを明らかにするものはめずらしい。

(9) 文史館とは解放後に設けられた歴史資料の編纂館で、おおむね歴史の「生き証人」といった人びとをあつめて、多くの回想録を蓄積しているところである。一九五九年いらい、最高の統一戦線組織である中国人民政治協商会議全国委員会のもとに文史資料研究委員会がもうけられて活動したようである。この周亜衛の属した文史館は、北京市文史研究館か、中央文史研究会かは未詳だが、かれの経歴からして後者ではないかとおもう。

(10) 政協即ち中国人民政治協商会議は、一九四九年九月に最初の会議を開き、各界代表を網羅して中華人民共和国の建国を決議した。それは全国人民代表大会(日本の国会にあたる)の成立(一九五四年九月)前には同大会の権能を代行し、同大会成立後は統一戦線組織として同大会を補助する地位をしめる。中央のが政協全国委員会で、省以下にもそれぞれ地方レベルのものがおかれている。特別招待代表とは、党派、団体等の各界代表の枠外に、無所属の名士として特別にえらばれるものである。周亜衛がその選に当たったのは、第二回(一九五四年十二月)、第三回(一九五四年四月)、第四回(一九五四年十二月—一九五五年一月)のことである。(『人

民手冊』一九五六、一九五九、一九六五年版)。

(11) 廬山訓練団(班)とは、『毛沢東選集』によれば、蔣介石が反動支配のための幹部を養成するために江西省廬山で開催した国民党員、政府人員中の高級・中級メンバー用の訓練班で、一九三七年七月の会議では抗日戦争中に共産党勢力を五分の二に減らすという計画をだしたという(第二巻所収「太原失陥以後抗日戦争的形勢と任務」注三)。一九四〇年ごろには、廬山は日本軍の支配下にあり、訓練団は重慶にうつって中央訓練団とよばれたようだが、その由来からして、ここでは廬山訓練団とよばれたであろう。なお、陳誠(二八九七—一九六五)は一九三四年五月に廬山訓練団主任となり、この国民党幹部養成機関で重要な役割をはたした。